

# 社会小説家と社会的な小説家 —ディケンズとギヤスケル

宮丸裕二

社会領域ということを考える時、公共のエリアとそうでないエリアの峻別が問題になろう。そしてその境界線を引く基準となっているのは社会的に共有される認識と考えることにする。そこで、ハーバースマスよりも以前に別の言葉でこのことを説明しようとしていたと思われる、エーリッヒ・アウエルバッハの『ミメーシス』の文章を借りて確認してみたい。リアリズムの中にどこまで取り込むことができるのかという議論の中で、スタンダールやバルザックのなし得なかった新たな現実感の描写としてフローベールの『ボヴァリー夫人』を取り上げてアウエルバッハは言う。

Through his level of style, a systematic and objective seriousness, from which things themselves speak and, according to their values, classify themselves before the reader as tragic or comic, or in most cases quite unobtrusively as both, Flaubert overcame the romantic vehemence and uncertainty in the treatment of contemporary subjects. . . .

The serious treatment of everyday reality, the rise of more extensive and socially inferior human groups to the position of subject matter for problematic-existential representation, on the one hand; on the other, the embedding of random persons and events in general course of contemporary history, the fluid historical background—these, we believe, are the foundations of modern realism, and it is natural that the broad and elastic form of novel should increasingly impose itself for a rendering comprising so many elements. If our view is correct, throughout the nineteenth century France played the most important part in the rise and development of modern realism.<sup>1</sup>

近代リアリズムが成立する上で大きな要素となっていたことの一つに、一般的な歴史の流れへの強い意識とそこに小説の物語を「はめこんでいった」ことがあるというのである。公共的な空間、場に存在しているということが近代性を体言する一つの認識だとすると、その時にいう公共的な空間というのは、いわゆる世界的な事件が起こる場、世界の中心、政治の中心に立っているか、そうでなくてもその世界に一つだけある中心軸とつながっている認識によって成立する。つまり、どこかの誰かの話ではなく、歴史上の特定の時と場所に一回性のものとして存在しているという認識である。我々が今日、新聞やテレビで見るようなニュース、世界的な出来事というものがあって、これと間接的であれつながっているという認識こそが、今日の世界の我々を作り上げていると言えるのである。恐らくこの世に一つしか存在したことがない世界の歴史の中の現在の部分に名を連ねる私、あるいはそれとつながっている私という自意識である。公共圏に属しているかどうかの判断基準は、つまり、歴史として記述されていることなのかどうか、あるいは瑣末に過ぎて記述としては省かれてはいても確実に歴史の一部であり得るのかどうかという点にかかってくる。

アウエルバッハによれば、フランス小説に比べて、イギリス小説というのは、18世紀はおろか19世紀になっても、現実感や、政治への意識が希薄だったとのことである。<sup>2</sup>しかし、社会小説やその周辺を見る時、あるいはこれまで注目されなかった表象に潜り込んでいる歴史性を読み込むことにある程度慣れたてきた我々には、イギリス小説における現実認識というものは再考の価値があるかも知れない。そこで、小説にどれくらい歴史への埋め込みがあるかというこの極めて計りやすい指標を持って、ギヤスケルの小説を考えてみたい。

## I. ディケンズを書くギヤスケル、ギヤスケルを書き換えるディケンズ

『メアリ・パートン』の成功を受けて、ディケンズがギヤスケルをいよいよ売り出すべく、1850年から自分の雑誌に執筆を依頼し、自分自身の創作活動のかたわら、いわばプロモート業に精を出す。そして、トラブルが起きるのはそれからほどない1851年12月のことである。ディケンズが主宰する雑誌『ハウスホルド・ワーズ』に依頼を受けたギヤスケルが『克蘭フォード』の不定期連載を開始するものの、その初回の掲載分でディケンズがギヤスケルの原稿を無断で書

き換えて出版してしまったことである。クランフォードの町で牧師の娘の立場に恥じない生活を心がけているミス・ジェンキンズはサミュエル・ジョンソン博士を偉大な文学者として崇めて、博士の『ラセラス』をこそ名文の鑑と考え自ら手本にしている。そこへ、町に新たに引っ越してきた退役軍人のブラウン大尉はボズ、すなわちチャールズ・ディケンズの『ピクウィック・ペーパーズ』を好んで読むため、二人が文学談義をする中でミス・ジェンキンズは徹底的にブラウン大尉を嫌ってしまい、ブラウン大尉の側では相手を嫌いはしないもののディケンズを面白いとする意見については一歩も引かない。これから自分の雑誌に掲載される原稿に自分の名前を見つけたディケンズは、この「ボズ」の部分で「トマス・フッド」に書き換えて『ハウスホールド・ワーズ』に掲載したのである。

作品を読んだ者は誰でも引きつけられるとおり、ミス・ジェンキンズとブラウン大尉のこのコミカルな対立は、『クランフォード』の最初に出てくる極めて魅力的な場面である。そして、最終的には長編小説として仕上がるこの作品の成功を約束するほど重要なシーンであり、それだけギヤスケルが力を入れて描いたことが推し量られる。ディケンズがこの部分をギヤスケルに無断で書き換えて出版した時の、残念さや、憤慨も理解できるところである。

また、ミス・ジェンキンズとブラウン大尉の文学論争のエピソードは、コミカルであるというだけでなく、もう一つの重要な側面から、無断修正の件と併せ、文学史上の重要な論点を与え、また文学批評の重要な素材となってきた。例えば夏目漱石は東京帝国大学の教壇でこの件を取り上げ、イギリス文学に生じた文体の大きなシフトと、それによる新たな読者層の構築、読書の流行の変化を示す典型的な事件であるという説明を加えたことは、今日『文学論』に所収されている通りである。

一方、フェミニズム批評という文脈でも時にこの件は注目を集めており、ペン／ペニスをもって男性が女性を支配下に置き、不当な暴虐を行使する典型例として挙げられることがある。

結果、ギヤスケルの怒りの抗議を受けて、ディケンズは平謝りの手紙を出していることを考えると、最後に挙げた種類の理解は些か極端かも知れない。

I am truly concerned for this, but I hope you will not blame me for what I have done

in perfect good faith. Any recollection of me from your pen, cannot (as I think you know) be otherwise than truly gratifying to me; but with my name on every page of “Household Words” there would be—or at least I should feel—an impropriety in so mentioning myself. I was particular, in changing the author, to make it Hood’s Poems and trust that the substitution will not be any serious drawback to the paper, in any eyes but yours.<sup>3</sup>

詫びる中で「自分が編集しているこの雑誌のあちこちに自分の名前が出てくるものだから」という言い訳にもなっていないような苦しい言い訳をしているが、それだけにディケンズが是が非でも必要なこととして書き換えたというわけでもないことが分かる。実のところ自分の名前が小説に出てきて、照れた結果書き換えただけのことと解するのが妥当なところだろう。そうであればこそ、改編を事前にギヤスケルにわざわざ伝えていないのである。

起きた事件の顛末は以上であるが、この件は公共圏ということに照らすと特別な意味を浮かび上がらせるのである。つまり、新興の文学者という扱いとはいえ、ギヤスケルが小説中でジョンソン博士と相並ぶ比較に挙げたディケンズは、既に文学の歴史に名を刻む文豪の扱いを受けている。ジョンソン博士の文学が古びて読まれなくなり、代わってディケンズの『クリスマス・キャロル』が読者を集めているという現象は、イギリス文学史の中心部分で起きていることであり、国家や時代の中心と確実につながったものとして認識される事象であったといえる。実際ディケンズは当時押しも押されぬ文豪の仲間入りをしていたことは疑いないが、その一方で、毎号毎号読まれては忘れられる雑誌掲載の綱渡りの中で将来的に名前が残るかどうかを不確実に思う者も多かったことだろう。時代を凌駕するビッグネームでありつつ流行のピークに瞬間的にいるだけかも知れないという、両義的なあり方をしていたのである。これは、そもそも小説というジャンルそのものがまだ後の時代の裁定を受けて正統な芸術の一形態と認められていない以上やむを得ないことではある。いずれにしてもギヤスケルは同時代の文学史の一側面を小説の中で綴ることで、ディケンズを歴史化して見せたのであり、さらにジョンソン博士と並べて博士同様の公共の存在として扱われたことを正しく理解したからこそ、ディケンズはこれを書き換えたのである。

## II. 社会小説を書くことと、書かせることと

世界の中心、政治の中心、歴史の中心を描写する、あるいはそれにつながる世界を描写する、いわば公共圏を描いた小説の話となると、ギヤスケルの文筆の中でいえば、『クランフォード』よりもむしろそれ以前に発表した社会小説こそは、公共圏を直接問題にしていたと言えるのである。アウエルバッハによると、フローベール以前のフランス文学ではスタンダールやバルザックに見るように未だ歴史へのはめ込みがなく、また地方市民階級の現実が日常にまだまだ反映されておらず、イギリス文学においてもディケンズやサッカリーに濃厚な実在感というものを見つつも、政治的社会的な動きは小説の中に描き込まれないままに19世紀を終えてしまったとのことである。<sup>4</sup>アウエルバッハは社会小説というジャンルにほとんど言及してくれないのだが、この文脈に話を持ち込む時、社会小説こそはそうした一回的な歴史、世界で共有される歴史的事件、その反映であり、そうした事件と直結する市民生活というものを描いたものとして遜色はないのではないだろうか。

ギヤスケルは『メアリ・バートン』を書く時も、『北と南』を書く時も、勿論架空の町に架空の人物を創造し、フィクションとして物語を進めているが、そうした匿名性はその小説に描かれる内容を現実から遊離させる効果を持たない。むしろ当時の社会の中で共有された社会的事件や中産階級や労働者階級の生活の現状をそのまま描いたものとして受容されていたジャンルだと考えていいだろう。注意を要する点としては、ここで言うのは何もギヤスケルが描いた内容が実際の史実に忠実であったとか、社会で現実に起きたことの描写しかしていないというわけではないということである。現実に起きてはいなかったであろうようなものごとの描写、あるいは小説ならではの脚色や嘘は当時の読者でも十分それと認識していたことだろう。ただ、ここで重要なのは、ギヤスケルが社会小説の中で描く労働者の生活や労働者の現状がその時代に特有なことの報告になっており、例えばチャーティズムなどの事件もこの時代を生きる人々が小説の中の人々と共有するような事件として描かれていることである。たとえアウエルバッハの眼鏡にかなうほど上手く描くことに成功していなかったとしても、その時代共有意識さえ見られるならば、公共圏への意識は十分に紙面に移されていたのである。

そして、当時においても、社会小説、社会問題小説、あるいは“condition-of-

England novels”と言われる小説群は、実はその書かれ方、表現のされ方は様々であり、決して一様ではない。その中で、ギヤスケルが書く社会小説では、上述のとおり現実に進む歴史の中にはめ込まれて描かれているために、「どこかの誰かの、あり得るかも知れないし、あり得ないかも知れない物語」ではなく、「現実によくいる人の話、あるいは当時その社会に生きていれば誰にも起こり得る物語」になっている。そのことが正に、匿名性のカバーがありながらも公共のものとしての時代や社会を描いているということなのである。このように社会小説の執筆者であることを通してギヤスケルは、その意味での社会、もうこの世界に一つのだけのものとしてつながった社会というものを記述する、いわば公共の社会の記述者であったのである。この世界にはいま誰がいて、どのような状況になっているのかを記録する。ギヤスケルがそうした記録者であったからこそ、ディケンズはそこら辺の知らない誰かの冗談のいたずら書きの中に自分の名前が出たというのとは違う認識をしたとも言えるのである。ギヤスケルが筆を執る時その内容が歴史化されることの効果を分かっていたのである。

ところで、ギヤスケルに社会小説を執筆させるように仕向けたのは、誰であろうディケンズである。最初の動機付けはギヤスケルの内的なものであったとしても、少なくともディケンズはギヤスケルに社会小説を書き続けさせようとしたことは確かである。ギヤスケルの2歳年下でありながら既に文壇で20年以上のキャリアを持っていたディケンズは、ギヤスケルに文章を書かせ、それを読者に届ける上で確実に力を持っていた。『メアリ・バートン』に感銘を受けたディケンズは1849年にギヤスケルと会い、もう翌年には『ハウスホールド・ワーズ』に寄稿を依頼している。そして1853年には短篇の掲載ではなく自分のように長編の連載を開始するように依頼し、実現したのが『北と南』である。初めての週刊雑誌連載はギヤスケルにとって相当過酷でありディケンズがそれなりの圧迫的な動機になっていたことがギヤスケルの手紙に見て取れる。

I made a half-promise . . . to Mr Dickens, which he understood as a whole one; and though I had a plot and characters in my head long ago, I have often been in despair about the working of them out; because of course, in this way of publishing it, I had to write pretty hard without waiting for the happy leisure hours. And then 20 numbers

was, I found my allowance; instead of the too scant 22, which I had fancied were included in ‘five months’; and at last the story is huddled & hurried up; especially in the rapidity with which the sudden death of Mr Bell, succeeds to the sudden death of Mr Hale. But what could I do? Every page was grudged me, just at last, when I did certainly infringe all the bounds & limits they set me as quantity.<sup>5</sup>

また、自身、雑誌執筆の重労働を知る者として、ディケンズもギヤスケルをねぎらって、連載終了の祝う手紙を書いている。

Let me congratulate you on the conclusion of your story; not because it is the end of the task to which you had conceived a dislike (for I imagine you to have got the better of that delusion by this time), but because it is the vigorous and powerful accomplishment of an anxious labor.<sup>6</sup>

ディケンズが他の様々なところに書き散らした『北と南』への感想は芳しい内容ではなく酷評をも含んでいたが、少なくともこの手紙からはギヤスケルを気分的に乗せて執筆へと向かわせようとしている。ギヤスケル本人が考えていた以上の執筆上の力をディケンズが引き出し、また人気雑誌である『ハウスホールド・ワーズ』という媒体を与えたことで広く読者を獲得する道筋をつけたのである。

興味深いことに、ギヤスケルが『北と南』を連載する直前の4ヶ月間、ディケンズもまた同じく社会小説と呼ばれる『ハード・タイムズ』を同雑誌に連載している。これはディケンズがストライキの起こったプレストンに取材した上で、架空の工業都市を舞台に労働者と経営者などその町の姿を描いた作品であるが、『ハード・タイムズ』の執筆はこの時期にディケンズがこのジャンルに強い関心を持っていたことを示している。『ハード・タイムズ』連載を巡っては、ギヤスケルが手紙の中で驚きを露わにし、ディケンズがストライキという題材を『ハード・タイムズ』では扱わないと聞いて安心し、それをディケンズとも距離が近い友人であるジョン・フォースターに宛てて書いているが、これは後で自分が連載するものとの重複を案じてのことであろう（そして結果的には『ハード・タイムズ』にはストライキが登場している）。<sup>7</sup>

このように社会問題を小説に描くという共通の関心を持った二人であるが、ストライキをはじめとする労働運動を含んだ小説への関心をディケンズからギヤスケルが得たというよりは、実状はむしろその逆であろう。実際『メアリ・バートン』を既に書き終えており、また掲載順と前後するものの『ハード・タイムズ』に先んじて既にギヤスケルが『北と南』の執筆に取りかかっていたことを考慮するならば、ディケンズが『メアリ・バートン』を読んで『ハード・タイムズ』を書き、またその関心がギヤスケルの『北と南』の連載につながったのだと考える方が自然だろう。<sup>8</sup>『北と南』連載は、それが掲載された『ハウスホールド・ワーズ』の編集長であるディケンズの関心の強さの影響を当然受けたものである。すなわち、ディケンズが編集過程において、『北と南』という作品を、『メアリ・バートン』や『ハード・タイムズ』に類するような社会小説と呼ばれるジャンルに属するものとして書かれることを期待するのが当然であり、またその影響を多分に『北と南』に与えたと考えられるのである。

実際、ディケンズはストーリーについてもあれこれと提案をし、手紙の中で自分が考えた5通りの結末をギヤスケルに提案するなど、相当なまでのお節介を焼いている。そうしたお節介の一つにタイトルの命名があり、『北と南』のタイトルに関してギヤスケルとディケンズの間に関わされた書簡で現存するものを並べると以下のとおりとなる。

Have you thought of a name? I cannot suggest one without knowing more of the story. Then perhaps I might hit upon a good title if you did not.<sup>9</sup>

Margaret Hale is as good a name as any other; and I merely referred to its having a name at all, because books usually have names, and you had left the title of the story blank.<sup>10</sup>

North and South appears to me to be a better name than Margaret Hale. It implies more, and is expressive of the opposite people brought face to face by the story.<sup>11</sup>

I think a better title than N. & S. would have been 'Death & Variations'. There are 5

deaths, each beautifully suited to the character of the individual<sup>12</sup>

勿論ギヤスケル側からこうした相談を持ちかけた可能性も否定はできないが、当初からディケンズが強く自分の意見を反映させようとする姿勢が書簡に見て取れるのは確かである。書簡に見るように、当初ギヤスケルが *North and South* の代わりに考えていた *Margaret Hale* というタイトルをディケンズは歓迎していない。結局 *North and South* に落ち着いて連載が開始した後もギヤスケルは *Death and Variations* というタイトルへの未練を残していることが伺える。ギヤスケルが思いついた *Margaret Hale* や *Death and Variations* といったタイトルから推察されるのは教養小説的な人間成長の物語であって、それと比較するとディケンズが提案する *North and South* というタイトルは、個人よりも社会、ないし政治、国家といったものを印象づけるのではないだろうか。そうであるとしたら、後に社会小説と呼ばれることになるジャンルに対して著者であるギヤスケル以上にディケンズは意識的であり、そのジャンルに属するような一作品をギヤスケルに書かせようとしていたのはディケンズの方だったということも浮かび上がってくるのである。当時現れた批評やカザミアンにおいても、『ハード・タイムズ』も社会小説ならば『北と南』も社会小説と、一括して同じ枠組みで論じることが一つの伝統になっており、これらを例えば教養小説としても読めるなどといった違う読み方が試みられるようになるまでは一貫して政治的闘争を描いた社会小説としてのみ捉えられてきた。こうした読み方やジャンル分類は、ディケンズの編集方針によって促された結果である部分が大きく、つまり、当時のディケンズの編集行為が、さながら最初の批評として機能していたのである。このように、ディケンズの頭の中では、ギヤスケルを社会小説の小説家として売り出すつもりしかなく、ギヤスケルを主に社会の観察者、社会の記録者としてプロデュースしようとしていたと言っただろう。

そして、ディケンズ自身が『ハード・タイムズ』をはじめとしていくつかの社会小説に手を染めるのもギヤスケルに感化された結果であるが、しかし決定的にギヤスケルと違っていることとしては、ディケンズはギヤスケルのように社会小説を自分の主たる仕事に位置づけようなどとはせず、飽くまで一時の流行として携わろうとしていたことである。さらに大きな違いはギヤスケルのように自分の

小説を公共圏を綴った歴史の中に置こうと意図しないことである。『ハード・タイムズ』にしても『クリスマス・キャロル』にしてもディケンズの社会小説に登場する匿名性はついでフィクションの中のみ存在するタイプの匿名性である。あるいはモデルとなっている土地の名前が特定されている場合でも時代設定をずらしてノスタルジックに描かれるなど、その土地に赴いたら実際に同時代人が観察できるだろうと思われるような描き方を避けるのである。ディケンズが書くのは、現実の社会にモデルを見つけることが難しい、現実の社会を切り取ったジャーナリズム的な受容を許さないタイプの社会小説ばかりなのである。

そしてギヤスケルは、社会小説家としての役割をディケンズから任せられながらもそれ以外の小説の執筆にも興味を示していたことは間違いない。そして実際、実在の歴史の中にはめこまれることを拒絶する教養小説を自ら志向していた面があるにせよ、ギヤスケルはブロンテの伝記を著した伝記作家としての顔も持っており、これはこれで自らの強い意志の下取りかかった仕事である。そうした意味では自ら歴史の記述者であろうとした動機付けはギヤスケル自身の中にも見出すことができるのである。

### III. 描く世界と描かれる自分

一方で、ギヤスケル自身が公共圏の中にいる自覚があったのかというと、それは別の問題になるだろう。いかに小説が売れて有名になろうとも、いかに人の伝記を綴ろうと、書き手である本人のことがほとんど知られていないのがギヤスケルなのである。19世紀という時代性を考えると信じられないほどに、作家としての伝記的事実として知られていることがらあまりに限られているとはヴァレリー・サーンダーズが指摘する通りで、自ら歴史を描きつつもその歴史から自らの身を潜めようとするかのようである。社会というものの記述者でありつつ、ギヤスケルという人物その人は当時の通常の作家が身につけていた程度の社会性というものをその身にまわっていなかったと言っていいだろう。そしてこの点に関しては必ずしも女性であるからという性別の原因だけに帰することには無理がありそうなのである。

今日、世界は一つになり、いよいよ狭いところになり、公共なる世界とつながっていない部分を見つけ出すことが難しくなっているのに比較すれば、所詮 19 世

紀の公共圏の認識は、西洋の一角、それも先進都市部の一角しか見えていないような限られた範囲に「世界」と名付けた程度のものであったかも知れない。しかし、反復不可能にして不可逆性を持ち、一回的なる、ただ一つだけのこの世界というものを感じ始めた意味では、当時に言う公共圏の方が現代よりよほど意味深かったという考え方もできるかも知れない。そうしたただ一つだけの共有される世界の感覚を持ち、やがてそれとつながり行く残りの世界、結果的に小さく、狭くなっていく世界という感じが強まるにつれて、そこに生きる人の匿名性も失われていくことは同時に実感されたに違いない。その中で、誰がなんと言おうと有名人に他ならないディケンズでさえも、その公共の中に自らを置く準備がなかったことはギヤスケルが偶然に明らかにした通りである。同時に、ギヤスケルもまた、その公共なる世界を題材として小説を執筆していたにもかかわらずその公共なる世界の一人として名前を残す覚悟は未だ育っていなかった。この公共圏が成立しつつある黎明期において、その時代を生きる側にとっては、完全に自分の匿名性を消し去って、その閉じたネットワークの中に自分を残してゆくことの自覚はまだ必ずしも育っていなかったのである。

## 注

本稿は第26回日本ギヤスケル協会全国大会（2014年10月4日於明治大学駿河台キャンパス）におけるシンポジウム「ヴィクトリア朝小説における社会領域とジェンダー」（発表者・宮丸裕二／大石和欣／倉田賢一）での研究発表に加筆訂正したものである。

1 下線は筆者による。Auerbach 491.

2 Auerbach 491-92.

3 Dickens, "To Mrs Gaskell." [4] Dec. 1851. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 6. 548-49.

4 Auerbach 463 and 492.

5 Gaskell, "To Anna Jameson." ? Jan. 1855. *The Letters of Mrs Gaskell*. 328-29.

6 Dickens, "To Mrs Gaskell." 27 Jan. 1855. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. 513-14.

- 7 Gaskell, "To John Forster." 23 Apr. 1854. *The Letters of Mrs Gaskell*. 279–81.
- 8 『ハード・タイムズ』の執筆計画の最初の言及は1854年1月である。Dickens, "To John Forster." 20 Jan. 1854. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. 254.
- 9 Dickens, "To Mrs Gaskell." 17 June 1854. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. 354.
- 10 Dickens, "To Mrs Gaskell." 2 July 1854. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. 363–64.
- 11 Dickens, "To Mrs Gaskell." 26 July 1854. *The Letters of Charles Dickens*. Vol. 7. 377–79.
- 12 Gaskell, "Charles Dickens." ?17 Dec. 1854. *The Letters of Mrs Gaskell*. 323–24.

### 引用文献

- Auerbach, Erich. *Mimesis: The Representation of Reality in Western Literature*. Trans. Willard R. Trask. Princeton: Princeton UP, 1953. Trans. of *Mimesis*. Berne: Francke, 1946.
- Carnall, Geoffrey. "Dickens, Mrs. Gaskell, and the Preston Strike." *Victorian Studies: A Quarterly Journal of the Humanities, Arts, and Sciences* 8.1 (1964): 31–48.
- Cazamian, Louis. *The Social Novel in England, 1830–1850*. Trans. Martin Fido. London: Routledge, 1973. Trans. of *Le Roman Social en Angleterre, 1830–1850*. Paris, 1903.
- Collins, Philip, ed. *Charles Dickens: The Critical Heritage*. The Critical Heritage Series. Gen. ed. B. C. Southam. London: Routledge, 1971.
- Dickens, Charles. *The Pilgrim Edition: The Letters of Charles Dickens*. Gen. ed. Madeline House, Graham Storey and Kathleen Tillotson. 12 vols. Oxford: Clarendon P, 1865–2002.
- Easson, Angus. Introduction. *North and South*, By Elizabeth Gaskell. Ed. by Angus Easson. The World's Classics. 1973. Oxford: Oxford UP, 1982.
- . *Elizabeth Gaskell*. London: Routledge, 1979.
- . "Mr Hale's Doubt in *North and South*." *The Review of English Studies: A Quarterly Journal of English Literature and the English Language* 31.1 (Feb. 1980): 30–40.
- Easson, Angus, ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. The Critical Heritage Series. Gen. ed. B. C. Southam. London: Routledge, 1991.

Gaskell, Elizabeth. *Cranford*. The Pickering Masters: The Works of Elizabeth Gaskell. Gen. ed. Joanne Shattock. Vol. 2. Ed. Alan Shelston. 1853. London: Pickering, 2005. 159–302.

———. *North and South*. The Pickering Masters: The Works of Elizabeth Gaskell. Gen. ed. Joanne Shattock. Vol. 7. Ed. Elisabeth Jay. 1855. London: Pickering, 2005.

———. *The Letters of Mrs Gaskell*. Ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard. 1966. Manchester: Mandolin, 1997.

Sanders, Valerie. Introduction. *Elizabeth Gaskell*. Lives of Victorian Literary Figures. London: Pickering, 2005. xix–xxxii.

夏目漱石、『文学論』、上下巻、岩波文庫。1907年。東京：岩波書店、2007年。

(中央大学教授)

**Abstract**

**A Social-Problem Novelist and a Novelist Who Is Social:  
Gaskell and Dickens**

---

**Yuji Miyamaru**

---

Elizabeth Gaskell, who started drawing attention as a writer who mainly wrote best-selling social problem novels, can be said to have taken up a central position in the public sphere, and to have been recorded in history as such. It can be said, however, that a determination to avoid taking a position in the public sphere can be seen in parts of Gaskell's life, the way she was treated, and in her works. This can be seen especially in her dealings with Dickens concerning her early works such as *Mary Barton* and *Cranford*, and the recognition of the two writers of each other's social position. In their relationship can be seen something more than just a simple binary opposition between Dickens the male writer and Gaskell the female writer.

It can be said that even Dickens, who was a celebrity and had gained high recognition in society, was not quite ready to see himself as a public figure. It can also be said that Gaskell, even though she was writing novels dealing with themes from the public sphere, was not yet prepared to take her place in that public sphere.